

第2章 計画地の現状

2-1 地理的環境

(1) 八代市の位置

八代市は、県都熊本市の南約40kmに位置し、東西約50km、南北約30km、面積約681km²を有している。西は八代海に臨み、北は八代郡氷川町、宇城市、上益城郡、下益城郡、東は宮崎県東臼杵郡、南は葦北郡と球磨郡に接している。

市域は、布田川-日奈久断層帯によって山間部と平野部に区分され、全面積の約75%が山間部、約25%が平野部で形成されている。

山間部においては、泉町と宮崎県椎葉村にまたがる国見岳（1,739m）が九州山地の脊梁地帯を形成している。また、平野部では日本三急流の一つである球磨川や氷川の両水系で形成された豊かな土地が広がり、扇状地や三角州を中心とした沖積平野が形成され、さらに中世以来の干拓による広大な平野を有している。



Fig.01 八代市位置図及び地形図

(2) 地形・地質

八代平野は遠浅の八代海の東側に形成された南北に細長い沖積平野で、平野の半分近くが近世以降の干拓地である。平野部の東側は、九州山地の西端に接し、標高 500m 級の山々がそびえ立っている。平野部と山間部との境界付近を北北東から南南西にかけて日奈久断層が走り、また臼杵-八代構造線の西端が、宮地町あたりに達している。市の南部に位置する日奈久地区には温泉が湧出している。

地質的には、この構造線以南が中生界の八代層、日奈久層、^{ともち}砥用層等の砂岩、頁岩、礫岩で、以北は古生界の肥後変成岩地域となっており、石灰岩、変成岩、花崗岩、蛇紋岩等から形成されている。

これらの山々の谷あいからは大小多くの河川が流れ出し、八代平野を潤しながら八代海へと注いでいる。主な河川は南から球磨川、氷川、砂川等である。これらの河川はそれぞれ下流域に三角州を形成しており、特に球磨川と氷川の下流域では発達が著しい。また、球磨川のすぐ北側に水無川が流れているため、両河川の運んだ堆積物によって複合三角州が形成され、沖積平野の発達が顕著である。自然陸化は山麓線から 5km 以上に及んでいる。また、平野部のかなりの部分が干拓によるため、勾配は 1/1,000 程度である。さらに、標高は山麓部では 5～6m、平野部中央で 2～3m を超える程度、海寄りの干拓地では、1m 未満と低くなっている。

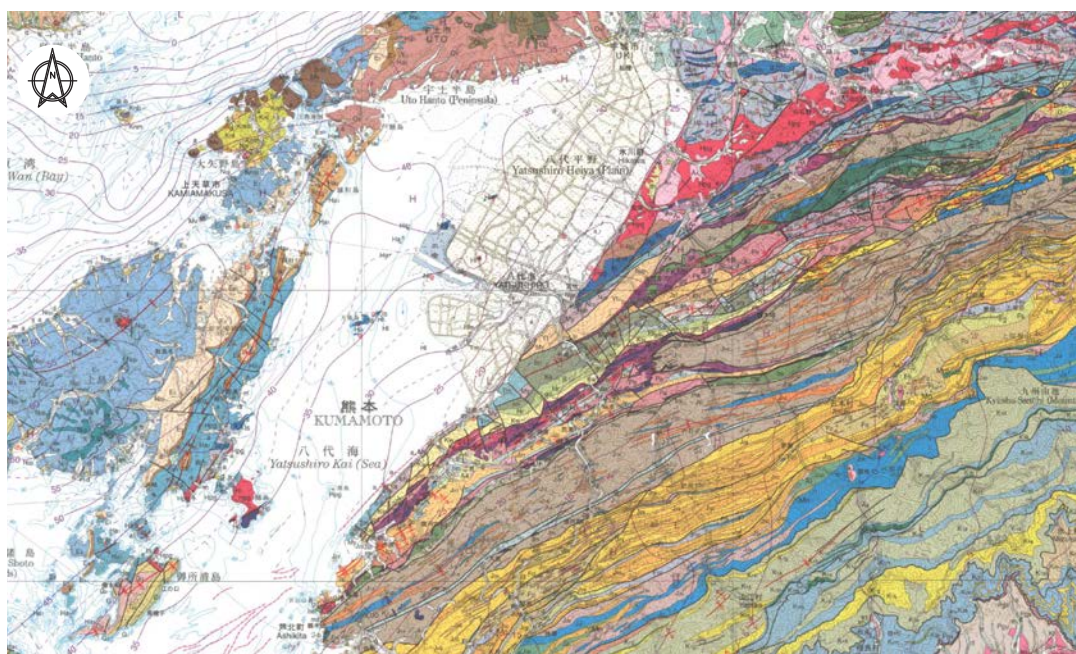


Fig.02 八代市地質図

(斎藤眞・宝田晋治・和光誠一・水野一博・星住英夫・濱崎聡志・阪口圭一・大野哲二・村田泰章 (2010)
20 万分の 1 地質図幅「八代及び野母崎の一部」, 産業技術総合研究所 地質調査総合センター)

2-2 自然的環境

(1) 気象

八代市の気候は、温暖な平野部と冷涼な山間部とに大別される。八代市統計年鑑によると、令和5年度の降水量は、1,670mm、平均気温 17.9℃、最高気温 37.2℃（8月）、最低気温-3.2℃（1月）を記録している。

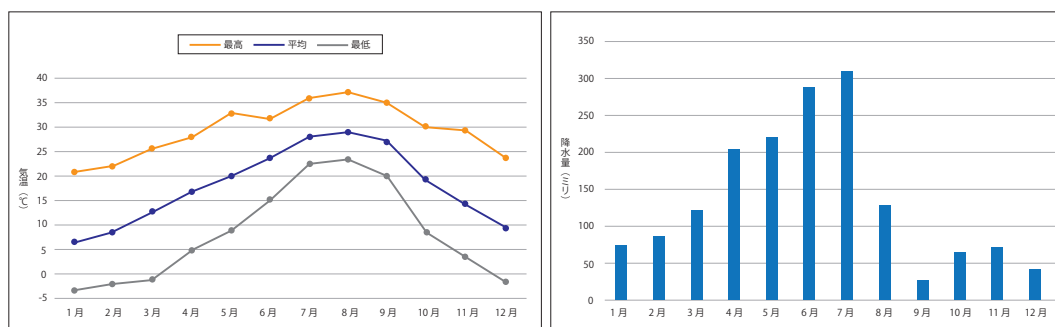


Fig.03 令和5年の八代市の月平均気温と降水量（八代市統計年鑑より作成）

(2) 植生・動物

八代市は、八代海に臨む干潟から、九州山地まで、豊かな自然に支えられた様々な植生が広がっている。特に、八代市を含む九州山地の一部は、九州中央山地国定公園や五木五家荘県立自然公園に指定される等、豊富な自然環境が保存されている。このうち五家荘は九州で最も原生林が保存されている地域であり、ブナ林を主体として、イチイ、シナノキ等の巨木が混在している。また、石灰岩の互層が伸びており、石灰岩峯に生息するイワギクやハズハハコ、イチョウシダ等が分布している。

山間部には、特定植物群落に指定されている五家荘のシラカワ谷のハシドイ林や大行寺山のツガ林等がある。また、熊本県希少野生動植物種に指定されているミチノクフクジュソウ、カタクリ及びカザグルマ等の多様な植物が生息している。

里山地域では、スギ、ヒノキの植林に加え、シイ、カシ等の二次林が多く、平野部は水田-雑草群落が主体となっている。

八代市内には、野生鳥獣の多様性を保護するため、7箇所、6,503haの鳥獣保護区が指定されている。また、球磨川及び氷川河口の干潟には、クロツラヘラサギやズグロカモメ等の希少種をはじめとした渡り鳥が数多く飛来することから、これらの地域一帯は、「日本の重要湿地 500」や「重要野鳥生息地」に選定されている。

2-3 歴史的環境

八代城跡群の立地する八代市には、縄文時代から近代までの遺跡が確認されている。平成13年(2001)度から15年(2003)度にかけて実施された、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、弥生時代及び古墳時代の良好な遺構・遺物を検出し、中九州の弥生・古墳時代の研究に寄与する多くの資料を得た。特筆すべき事例として、用七遺跡^{ようしち}における方形周溝墓の検出と青銅製鏡片・ヤリガンナ^{かみひおきめおとぎ}の出土、上日置女夫木遺跡^{かみひおきめおとぎ}における小銅鐸及び木製扉の出土、西片園田遺跡における大量の木製品の出土が挙げられる。

中近世の遺跡の調査も実施され、古麓能寺遺跡、古麓城下遺跡における調査で、戦国期肥後国八代荘の構造と、中世八代城とその城下構造の解明につながる資料を得た。

また、市内では、毎年11月22・23日に、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の一つである「八代妙見祭」が八代城跡の城下町を中心に開催されている。

八代妙見祭は、八代神社(妙見宮)の秋季大祭である。妙見宮は延暦14年(795)に桓武天皇の勅願によって社殿が創建された。妙見中宮は上宮の麓、中宮川の谷の奥にあり、永暦元年(1160)3月18日、二条天皇の勅願により肥後守平貞能朝臣が創建した。また、妙見下宮は文治2年(1186)11月15日、後鳥羽天皇の勅願によって^{けんぎょうさんみおおえのあそんたかふさ}検校散位大江朝臣高房が八代郡太田郷赤土山の下に創建したと伝えられている。その後、戦国時代の余波を受けて一時衰退することとなった。

八代が加藤清正の所領となり、清正の没後、八代城代加藤正方^{まさかた}は妙見宮の復興にあたり、元和8年(1622)12月、殿宇を創建し田畑を寄付し崇敬社とした。寛永9年(1632)、加藤氏の改易により熊本城には細川忠利が、八代城には忠利の父細川忠興(三斎)が入城した。細川家の家史である『綿考輯録』^{めんこうしゅうろく}によると、忠興は妙見宮に伝来する四寅剣を見て、細川家の紋(九曜と引両)と妙見宮の神紋が同じであることに不思議な縁を感じ、先例のように社領として現米8石4斗7升を与え、祭礼を保護した。さらに寛永17年(1640)には100石の社領を寄付した。忠興の没後、松井氏が八代城に入り、妙見宮祭礼は細川家の直祭りから松井氏代々の請祭りとして豪華な祭礼が行われるようにな



Photo.02 妙見祭の龜蛇

り、長崎諏訪神社・博多宮崎宮と併せて九州三大祭りと云われるほどの盛況を呈した。

明治初年の神仏分離令によって白木山神宮寺を首坊とする15の天台・真言宗の寺院は廃止され、以後は八代神社と改称する。妙見祭は今日に至るまで脈々と受け継がれ、八代城跡群と共に八代市を代表する文化財となっている。

現在、八代妙見祭は9基の笠鉦をはじめ、亀と蛇が合体した想像上の動物である亀蛇^{きだ}・獅子・花奴・木馬等の壮麗な出し物が連なり、市内約6kmを渡り歩く勇壮な神幸行列となっている。この行列は平成23年(2011)3月9日付で国の重要無形民俗文化財に指定されるとともに、平成28年(2016)12月1日には妙見祭を含む全国33件の国指定重要無形民俗文化財が「山・鉦・屋台行事」として、ユネスコの無形文化遺産として代表一覧に記載された。

(1) 旧石器時代

八代市内では、旧石器時代の遺跡はまだ発見されていない。近隣では氷川町^{たてがみ}の立神ドトク遺跡でナイフ形石器が採集されている。

(2) 縄文時代

この頃は、現在の八代平野の大部分は陸地化しておらず、遺跡は、山麓や干拓以前の島嶼^{とうしょ}に多く存在している。

早期～前期の遺跡としては、押型文土器や石器が出土した高島遺跡、押型文・曾畑式土器が出土した産島貝塚^{うぶしま}がある。

中期の遺跡としては、阿高式土器や石鏃が出土した五反田貝塚、阿高・南福寺・出水式土器や石鏃が出土した田川内貝塚がある。

晩期になると、徐々に自然陸化が進んだようで、夜臼式土器が出土した鐘楼堂^{しょうろうどう}遺跡等、平野部にも遺跡が見られるようになる。

(3) 弥生時代

平野部に集落が形成されるようになり、球磨川右岸の島田遺跡、用七遺跡、上日置女夫木遺跡、西片百田遺跡、キリシタン寺院等で竪穴住居跡が検出されている。特に、用七遺跡から出土した青銅製ヤリガンナと上日置女夫木遺跡から出土した小銅鐸は、それぞれ国内出土の南限となっており、北部九州と八代平野の交流を検討する上で重要な資料である。



Photo.03
上日置女夫木遺跡出土小銅鐸

また、球磨川左岸に位置する下堀切遺跡^{しもほりきり}でも、弥生時代後期の集落をめぐる溝が確認され、木製農耕具が出土している。

(4) 古墳時代

古い時期の方形周溝墓が、用七遺跡や上日置女夫木遺跡で確認されている。また、八代では島嶼、山麓、平野部に多くの古墳が見れる。島嶼にある竪穴式石室^{くすのきやま}の楠木山古墳は築造年代が4世紀と考えられ、八代平野南部では最も古い古墳である。さらに、装飾古墳もあり、熊本県指定史跡である田川内第1号古墳は横穴式石室内部に二重同心円等を刻んだ装飾古墳として知られている。八



代平野東部山沿いにも大塚古墳^{たかとりうえ}や高取上の山古墳^{やま}、乙丸古墳群^{おとまる}、上片町鬼の岩屋古墳群等多くの古墳が築造されており、付近に集落が形成されていたと考えられている。また、西片稲村遺跡では竪穴式住居跡が確認されている。

Photo.04 田川内第1号墳石室内部

(5) 古代

『和名類聚抄』によると、八代郡は奈良時代に「夜豆志呂」と表記され、「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の五郷が置かれていたとされる。このうち「高田」は奈良木町一体と考えられ、駅路の「朽網^{くたみ}」は二見本町、「片野」は上片町に比定され、上片町の北隣の川田京坪遺跡（川田町西）では、「川大」と篋書きされた土師器が出土している。また、宮地観行寺遺跡^{かんぎょうじ}（宮地町）でも、これと同じ筆跡で「川大」と篋書きされた土師器が出土し、注目される。洗切遺跡^{あらいきり}（清水町）では奈良三彩片と「王成古」と墨書された須恵器、「宣」「旦仲」「高人」「四郎」「五月」「六寺」と篋書きされた土師器が出土している。

興善寺廃寺跡（興善寺町）、五反田遺跡、観行寺跡（宮地町）、能寺跡（古麓町）、護神寺跡、妙見上宮跡（妙見町）等では布目瓦が表採されている。沖片遺跡、宮地池尻遺跡、宮地観行寺遺跡、古麓能寺遺跡では円面硯^{みうち}が出土し、御内遺跡（古麓町）からは瑞花双鳳八稜鏡、宮地池尻遺跡からは八稜鏡の破片が出土している。宮地町では複数の石帯が出土しており、福正寺遺跡^{ふくしょうじ}では土師器・須恵器・北宋銭とともに石帯1点、宮地池尻遺跡で2点、宮地小畑遺跡で1点出土している。また、西片乙津南遺跡^{おつ}からは腰帯に付ける飾具である丸鞆が1点出土している。

これらはいずれも遺構に伴うものではないが、出土層位の年代は古代を主体とするものであり、周辺に官衙の存在を想定することができる。護神寺跡と興

善寺廃寺跡に塔心礎が残されており、興善寺廃寺跡に建立された明言院には、平安時代の作とされる毘沙門天立像が遺存している。

また、近年都市計画道路建設に伴い、西片稲村遺跡・西片下通丸遺跡、西片乙津遺跡、西片乙津南遺跡の発掘調査が行われ、南北の環濠で挟まれた区域から「馬取」銘の刻書土器が6点出土した。当該地周辺には古代官道の西海道が走っていたことから、「馬取」銘刻書土器が出土した西片下通丸遺跡・西片乙津遺跡・西片乙津南遺跡には「駅家」に関する施設があったと考えられている。



Photo.05
西片下通丸遺跡出土「馬取」銘刻書土器



Photo.05

西片下通丸遺跡出土「馬取」銘刻書土器

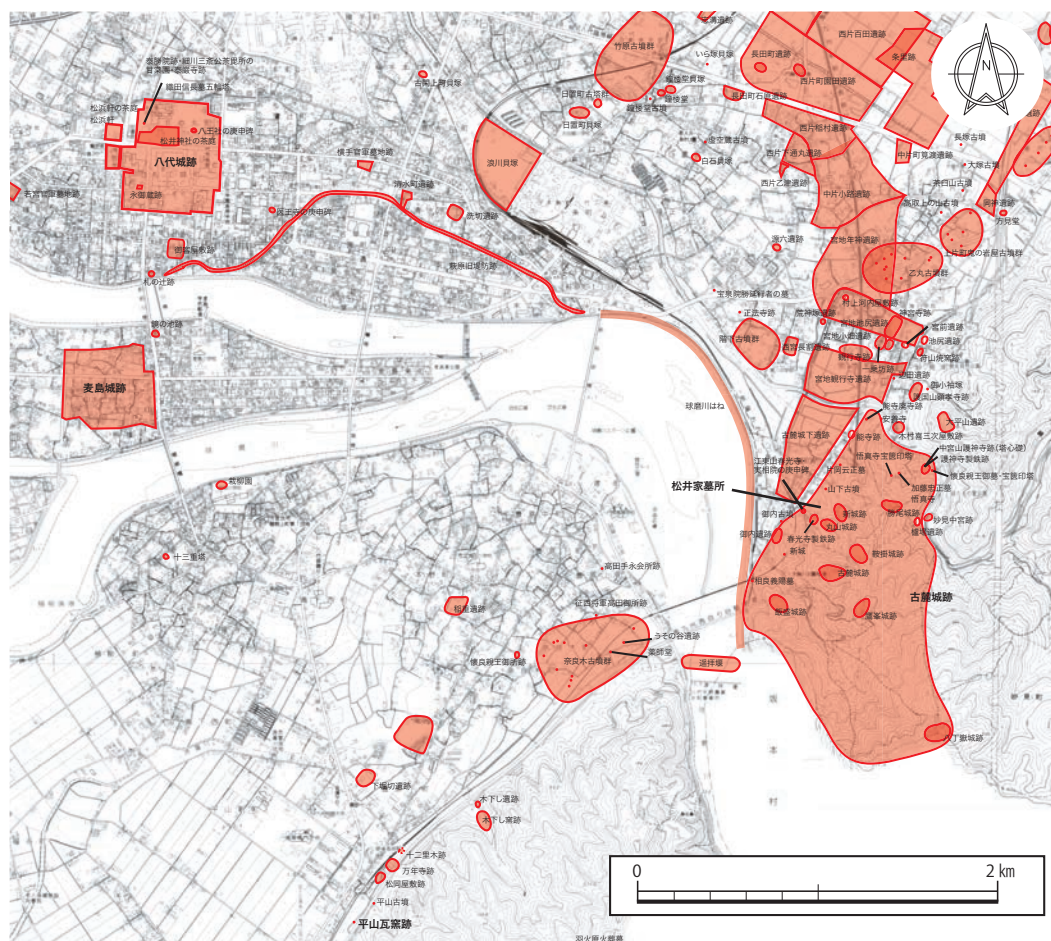


Fig.04 八代城跡群周辺遺跡分布図

(6) 中世

八代荘は平家に与えられていたが、平家滅亡後は一条能保室（源頼朝の実妹）の遺領としてその名が見える。したがって、八代荘は鎌倉時代成立期には平家から一条家に伝領され、その後は北条氏の得宗領か有力一門の領地であったと考えられている。「小早川家文書」（熊本県指定）の文永7年（1270）預所沙弥某宛行状、及び同文書の建治2年（1276）兵庫助某宛行状の記述内容から、13世紀中頃までに八代荘の開発が行われていたことが確認される。

また、熊本県宇城市の舩田家に伝わる『舩田文書』（『熊本県史料』中世篇3）の、正和3年（1314）八代荘伊賀左衛門入道代光蓮申状によると、「八代庄三ヶ村」の伊賀左衛門が「同庄太田郷宮地白木社」の供僧弁秀の非法を訴えている。宮地白木社は八代神社（妙見社、熊本県指定文化財）の下宮であることから、14世紀初頭には八代神社の下宮が宮地村（現八代市宮地町）に所在していたことがわかる。

この他、八代市内の悟真寺（妙見町）、辻遺跡（西片町）、西片稲村遺跡（西片町）、中片小路遺跡（中片町）、鐘楼堂遺跡（井上町）では鎌倉時代並行期の同安窯系青磁と龍泉窯系青磁が出土している。

南北朝期になると、建武元年（1334）に後醍醐天皇から名和義高が八代荘の地頭職を賜り、荘の一部を出雲国杵築大社に寄進した。義高は翌2年（1335）に八代荘の代官として内河義真を派遣するとともに、阿蘇・菊池氏とともに南朝方に与して各地を転戦した。また、正平2年（1347）には懐良親王が高田に滞在し、高田御所の始まりとなった。

古麓城（中世八代城）が文献に初めて現れるのは正平3年（1348）のことである。『阿蘇文書』に「八代城事、當住人等不安堵候之間、面々歎申候由」とあり、古麓城のことを「八代城」と記している。また、『武雄神社文書』（『佐賀県史料集成』第2巻）明徳2年（1391）9月日条の武雄社大宮司跡代新兵衛尉軍忠状には、「八町嶽城」を北朝方の今川了俊が攻撃し、南朝方の名和顕興を降伏させたことが記されている。

また、相良長統及び為統に従った犬童重国の目安の案文である、「犬童重国軍忠状案」（「新宮家文書」の「新宮庄大夫覚書」所収）に古麓城に関する記載がある。文明8年（1476）10月7日条に「廻悟真寺口、城戸二重切破」と記されている。これは相良氏が名和氏の居城である古麓城を攻めた際、悟真寺方面から攻め登り、（古麓城の）二重の城戸を破って攻め入ったということである。この城戸は古麓城跡の遺構であると推察される。

戦国期になると、家督相続をめぐる相良為統の応援を受けた見返りとして、

文明15年(1483)に名和顕忠が高田350町を相良氏に割譲した。しかし顕忠は、相良氏が薩摩へ侵攻中に高田を武力で奪回したため、文明16年(1484)、相良為統は「八代三ヶ所城」を落城させ、名和氏を追放し、八代は相良氏の所領となった。

相良氏は翌17年(1485)から八代の領域支配を本格化させたが、明応8年(1499)に肥後国守護職の菊池能運の力によって名和顕忠が八



Photo.06 古麓城跡航空写真

代に復帰した。しかし、文亀元年(1501)には再度相良長毎が高田城を拠点に八代を攻略し、永正元年(1504)以降、八代は相良氏の領地となった。長毎は永正9年(1512)に嫡子長祇^{ながまさ}に家督を譲り、高田今出水に館を築き隠居した。

相良氏支配下の八代では、『八代日記』天文3年(1534)閏1月16日条に「たかの峯城取鋤立」と記されるように、相良長唯によって鷹峯城の築城が開始された。また、同年2月10日条には「長唯様始たかみね城ニ御在城候」とあることから、鷹峯城は完成していると考えられる。さらに、『求麻外史』天文3年(1534)条にも「新築城於八代鷹峯」と記される等、中世八代城と城下町の整備が行われた。相良氏による整備によって、古麓城下は家臣団の居住区や工匠・商人の居住区が拡張された。

他方、『八代日記』天文12年(1543)1月19日条に「八代七日市九日市焼候」、天文18年(1549)4月19日条に「八代杭瀬三町焼失」、天文23年(1554)12月18日条に「杭瀬一日市九日市両町西片一方焼亡七日町其余不焼候」等とあるように、城下町の被災関連記事が見えることから、既にこの頃には城下町が形成されたことや、町が度々火災に見舞われていたことが確認できる。

相良氏は鷹峯城の築城や城下町の整備とともに、球磨川河口に所在する、肥後国の主要な港であった徳淵の津の整備も行った。

長唯は天文7年(1538)6月から市木丸という大型船を建造し、翌8年(1539)には進水式を行っている(『八代日記』天文7年6月19日条及び天文8年4月13日条)。また、『八代日記』天文23年(1554)7月12日条に「渡唐仕候市木丸御舟徳淵着候」とあり、市木丸が明に渡っていたことがわかる。『八代日記』には、このほかにも「渡唐」という文言が散見されるので、整備した徳淵の津を中心にアジアとの交易を行っていたのである。

一方、大友義鑑は、天文12年（1543）に、將軍足利義晴から肥後守護補任状を得て、肥後を勢力下に置いた。

古麓城と城下及び徳淵の津の整備を進めた相良氏であったが、天正10年（1582）に島津氏の肥後侵攻により降伏した。古麓城は島津義弘に預けられ、島津氏家臣の平田光宗が八代に駐留し、城下の屋敷を宿館として利用している。

肥後国では菊池氏の勢力が衰えた後、有力な国人層である小代氏、隈部氏、赤星氏、合志氏、城氏、名和氏、阿蘇氏、相良氏等が割拠していた。しかし、いずれも一国を束ねるだけの勢力・実力を有しておらず、国内の国人衆は豊後の大友氏、薩摩の島津氏、肥前の龍造寺氏等の勢力の影響を受けていた。

肥後国の守護であった菊池氏は戦国大名へ転化できなかった。義鑑の弟大友重治（菊池義武）は菊池氏の家督を継ぎ、肥後の守護職にも任じられたと考えられているが、大友氏による肥後支配は安定せず、幾度となく戦乱が起こった。特に、旧菊池氏家臣の赤星親家と隈部親永の対立が激化し、永禄2年（1559）の合勢川の戦いを契機に赤星氏は大友氏の助力を得ることとなった。一方、隈部親永は龍造寺隆信に救援を頼んだ。この頃、大友氏は島津氏との戦闘を繰り返していたが、天正6年（1578）11月の耳川合戦で島津氏に敗北した。

耳川合戦における大友氏の敗北を契機に大友氏の勢力は急速に衰え、天正7年（1579）に龍造寺氏は筑後を制圧して肥後に侵入した。龍造寺氏は天正9年（1581）再度肥後を攻め、肥後北部を支配下に置き、隈部親永が隈府城主となった。

これに対して、大友氏を頼っていた隈本城主親冬は大友氏を見限り、島津氏を頼った。天正8年（1580）、島津義久は城氏の求めに応じて肥後番衆として佐多久政等を派遣した。翌9年9月に島津義久の命で水俣城を攻め、相良義陽は葦北を島津氏に割譲し、同氏の軍門に降った。義陽は島津軍の一員として甲斐宗運と響ヶ原で戦ったが、戦死した。この戦いの結果、島津義久は八代に島津義弘を置いた。

島津氏は勢いを得て、天正12年（1584）に島原において龍造寺隆信を攻め、隆信は戦死した。これ以後、肥後はほぼ島津氏の勢力下となった。同7年から始まった島津氏の肥後侵攻と勢力下への編入の過程において、八代は島津氏の肥後における拠点となった。島津氏は肥後制圧後さらに筑後への侵攻を目指したが、大友氏の勢力がいまだ強く、島津氏は侵攻を断念して八代へ帰陣するとともに、大友宗麟に対して豊後への帰陣を求めた。翌13年には、島津氏の肥後制圧はほぼ完了した。

(7) 織豊期

天正15年(1587)、大友宗麟の要請によって豊臣秀吉が九州攻めを行い、島津氏は豊臣軍に押されて退却し、南下した。4月19日には秀吉が古麓城に入城し、4日間滞在した。秀吉は福島正則を古麓城の守将に任じた。この秀吉の九州攻めと九州国分けを契機として、九州・熊本の近世の幕が上がった。

九州攻めの後、秀吉は九州の国分けを行い、島津氏は薩摩と大隅、日向の一部を安堵されるとともに、九州各地には豊臣系大名が領地を宛行われて入国した。肥後は同年6月に佐々成政に宛行われて番台が置かれたが、検地断行に端を発する国衆一揆の責を問われ、尼崎にて切腹を命じられた。成政切腹の後、肥後の北半分と葦北郡の一部は加藤清正に、肥後南部の宇土・益城・八代・天草は小西行長に宛行われた。

行長は城代として小西美作行重(小西末郷)を古麓城に入城させたが、行長は新たに徳淵の入江と球磨川に囲まれた麦島に新しく麦島城(織豊期八代城)を築き、古麓城は廃城となった。

ところで、織豊系城郭とは、天正4年(1576)に織田信長が琵琶湖畔の安土山に築いた安土城にはじまり、石垣、瓦、礎石建物の三要素で構成される城郭の総称である。織豊系城郭は、はじめに信長、そして本能寺の変以降は秀吉の勢力が拡大するのと歩調を合わせて各地に伝播していった。

しかしながら、関西や東海地方と異なり織田「政権」による影響力が乏しかった九州では、天正15年(1587)の秀吉による九州攻めと、戦後の九州国分けに従う豊臣系大名の入国による城郭築城が導入の直接の契機となった。九州攻め以前には、織豊系城郭技術に基づいた石垣を有する城郭は基本的に存在せず、土塁や畝状堅堀群、堀切等、あるいは石積み技術によって城郭を築いていた。

九州攻めと九州国分けの結果、天正16年(1588)頃から九州において織豊系城郭が築かれるようになり、小早川隆景が筑前に築いた名島城、黒田長政が豊後に築いた中津城、そして小西行長が肥後に築いた麦島城(八代城)の3城



Photo.07 麦島城跡本丸石垣



Photo.08 麦島城跡小天守石垣

跡が確認されている。また、近年、隆景が名島築城以前に居城とした立花山城も改修を受けて織豊系城郭化したことが確認されている。

その九州の織豊系城郭は「豊臣政権下と江戸時代初期において豊臣系大名によりある一定の築城技術・理念に基づき築城された城郭」と定義されている（宮武 2003）。しかし、織豊系城郭技術の導入とともに在地系技術による城郭が駆逐されたのではなく、薩摩や日向等豊臣系大名に宛行われず、島津氏等在地系の大名に本領安堵された地域では、在地系の城すなわち求心構造に乏しく、虎口等が未発達であり、限定的な石垣あるいは石積みを用いた南九州型の中世城郭を基盤とする城郭が、一定期間あるいは明治維新直前まで並存していたことが指摘されている。

なお、はじめに肥後を宛行われた佐々成政が国内でどのような城郭を築いたのかは明らかとなっていない。ただし、近年、成政によって熊本県甲佐町の陣ノ内城跡（陣ノ内館跡）が改修を受けた可能性が指摘されている（山内 2010）。

さて、麦島城に関連する史料は非常に乏しく、当時の史料は財団法人永青文庫の所蔵である『慶長肥後国絵図（写）』に代表される。麦島城が廃れた後の史料としては、『八代郡高田手永麦嶋村今度村圍塘築立奉願候絵図』（八代市立博物館未来の森ミュージアム所蔵、以下「市立博物館」とする）、あるいは加藤氏改易後に入国した細川氏関連史料中に巡検使の麦島城跡視察関連の記述がある。その他に江戸中期以降に編纂された『肥後国誌』や『国郡一統志』等、あるいは加藤清正の伝承をまとめた『清正勲績考』等の編纂史料に麦島城に関する記述が見える。

麦島城は、豊臣秀吉の家臣であった小西行長が、天正 15 年（1587）の秀吉の九州攻めと、それに続く九州国分け直後の同 16 年 頃に築城を開始したと考えられる。もっとも、麦島城の正確な築城年と竣工年は不明であり、『清正勲績考』の梅北一揆の条によると文禄元年（1592）においてまだ普請途中であったようだが、本丸部分の石垣等、城郭の主要部分は完成していたと判断される。したがって、小西行長時代には本丸等の城の主要な縄張りや施設は完成していたと考えられる。

麦島城を築いた行長は、豊臣秀吉の朝鮮出兵に先立つ肥前名護屋城の築城にも関与し、割普請に従事した。行長は文禄の役において、姻戚関係にあった対馬の宗義智とともに第一軍として参戦し、現在の平壤付近まで侵攻した。行長は戦線に従事するとともに、他方では和睦を目指して明や朝鮮と和平交渉を進めた。

行長が朝鮮半島で戦っている最中、島津氏家臣であった梅北国兼等は一揆を起し、加藤清正の支城であった佐敷城（熊本県芦北町）を占拠させるとともに、行長の支城であった麦島城を攻撃するが、小西側の抵抗に遭い撤退し、後に一揆は鎮圧された。

文禄の役は行長や石田三成の尽力によって一応の和平案がまとまって終結するも、豊臣秀吉謁見の場にて和平工作が露呈し、和平案は破綻した。和平案破綻後、慶長2年（1597）に再度、秀吉の命により日本軍は朝鮮半島に上陸し、戦闘を続けた（慶長の役）。慶長の役では、行長は全羅南道南原の戦いに参戦し、あるいは順天倭城で朝鮮・明の連合軍に包囲された清正の救出にあたった。慶長の役は、秀吉の死去によって終結した。

慶長の役が終結すると、石田三成を中心とする更幕派と徳川家康との対立等を要因として、慶長5年（1600）関ヶ原の戦いが起った。肥後の小西行長と加藤清正は文禄・慶長の役時から続く双方の対立等の要因から、三成方（西軍）に行長が、家康方（東軍）に清正が参戦した。西軍は敗れ、行長は三成や安国寺恵瓊とともに処刑された。行長の本城であった宇土城は10月14日に、支城であった麦島城は10月17日に加藤氏により開城・接收され（阿蘇品 2006）、加藤正方が城代として城を預かることとなった。加藤氏の支城となった後、麦島城は本丸を中心に改修されるとともに、平山瓦窯が築かれて城主加藤家の家紋瓦や城代加藤正方の家紋瓦等が焼成され、城に葺かれたと考えられる。

関ヶ原の戦い以後、麦島城は熊本城を中心とした加藤氏の本城-支城体制に組み込まれ、佐敷城、水俣城とともに隣国島津氏に対する牽制、「境目の城」として機能した。

また、小西氏から加藤氏支配となった八代では、小西時代には庇護されていたキリシタンが慶長8年（1603）に麦島の地で処刑され殉教した。現在は、麦島城天守台跡の北側にキリシタン殉教者列福記念公園が整備されている。

（8）江戸時代

徳川家康の江戸開府後も、公儀二元論に代表されるように豊臣秀頼の大坂城や西国は未だ不穏であり、肥後では関ノ城（南関城）や佐敷城の改修等が行われていた。他方で、小西行長の本城であった宇土城や矢部城が廃城となる等、肥後における本城-支城体制の増強と再編が進められた。その一環として、麦島城も本丸部分を中心に改修が行われたのであろう。この時期に描かれた『慶長肥後国絵図（写）』には、肥後国内の13箇所の城が描かれており、麦島城は熊本城と並んで外観3階建ての天守と付櫓、石垣を持つ城として描写されている。



Photo.09 地震で倒壊した麦島城跡の平櫓



Photo.10 八代城跡本丸航空写真

麦島城跡の石垣は石灰岩を用いた野面積みである。

加藤氏が清正から忠広へ代替わりをした翌年の慶長17年(1612)には、宇土城、水俣城、矢部城が破城となった。大坂夏の陣後、同20年(1615)に出された「一国一城令」では、加藤氏の本城である熊本城と支城の麦島城以外の城は破却された。ここに肥後熊本の一国二城体制が確立し、加藤氏改易後に入国した細川氏時代を通して、明治維新まで二城体制が継続することとなる。

しかし、麦島城は元和5年(1619)3月に起った地震によって倒壊し、城郭は麦島の地に再建されることなく同8年(1622)に松江の地に移転された。この移転された城郭が八代城(江戸期八代城)である。本丸東側の頬当御門前にかかる欄干橋に「元和八年二月吉日」銘擬宝珠が残されていたが、現在は保存のために取り外されて市立博物館に寄託されている。

なお、麦島城の瓦を焼成していた平山瓦窯も、新城竣工に伴い廃絶し

たと考えられる。八代城築城時の瓦を焼成した瓦窯は、現時点では確認できていない。

新城竣工から10年を経た寛永9年(1632)6月、加藤忠広は改易となり、同年12月に豊前から細川忠利が肥後熊本に入国した。また、八代城には忠利の父である細川忠興が中津城から入城した。

細川氏の肥後入国後の寛永10年(1633)に、幕府の上使衆が肥後の巡検に訪れた。『細川家史料』(『大日本近世史料細川家史料』五)によると、上使衆は地震で倒壊した麦島城跡の現況に関心を持ったようである。

寛永14年(1637)10月には天草・島原の乱が起こり、小西行長の旧領を抱える熊本藩では、細川氏が天草・島原に軍勢を派遣し戦功を上げた。

乱の終結を受けて、幕府は寛永16年(1639)、ポルトガル人の追放と来航を禁止したが、翌17年(1640)にポルトガル船が長崎へ入港し、幕府は遠見番所を設置、九州各大名に異国船への警戒にあたさせた。細川氏も八代・佐敷・川尻・南関等に番所を置いて警戒にあたった。天草・島原の乱以降、八代城は薩摩への牽制の機能とともに、異国への警戒の役目が加わったと考えられる。

寛永18年(1641)に初代藩主の細川忠利が死去すると、光尚が2代藩主となった。また、正保2年(1645)閏5月には八代城の細川立孝が、同年12月には前藩主忠利の父で八代城の忠興も死去したため、光尚は幕府老中の許可を得て、翌3年(1646)に細川家筆頭家老の松井興長に八代城を預け、以後、松井氏が城主(城代)を務めた。

松井興長は八代城入城後、北ノ丸にあった泰勝院を宗雲寺と改めて松井家の菩提所とした。その後、4代直之のときに3代藩主細川綱利の命により、熊本にあった春光院を八代古麓に移し、延宝5年(1677)に江東山春光寺と改めた。これ以後、春光寺は松井家歴代当主とその正室及び松井一族が眠る墓所(松井家墓所)となり、現在に至る。

なお、元禄元年(1688)には松井直之が母崇芳院尼のために、八代城本丸北西に浜の御茶屋(松浜軒)を建立している。松浜軒は平成14年(2002)に国の名勝に指定された。

八代城は度々建物や石垣、庭園の池等の改修・修復を行っている。寛文12年(1672)2月には落雷による火災により、天守や小天守等を焼失した。翌延宝元年(1673)に再建に着手したが、天守は再建されず、小天守、唐人櫓、埋御門等が再建された。その後も幾度となく火災や石垣の崩壊等の被害を受けた。

寛政9年(1797)10月の火災では、小天守、本丸御殿等が焼失し、同11年(1799)にそれらの再建に着手した。

八代城は上述の通り、火災等の被害により建物は現存していないが、城下の町割や近世の寺院が現在も良く残っている。

八代平野はその3分の2が、江戸時代以降に本格化した八代海の干拓によって形成されている。そのため、市内には江戸時代から明治・大正・昭和の各時代における干拓堤防跡や樋門跡等が保存されている。

このうち、高島新地旧堤防跡は、文化13年(1816)に八代城代松井^{あきゆき}徴之の指示により、高子原村と松崎村が築いた高島新地干拓(187町歩)に伴う堤防と樋門であり、肥後細川藩に特徴的な有力家臣による初期の干拓の有り様を示



Photo.11 高島新地旧堤防跡



Photo.12 大鞘樋門群「殻樋」

す希有な遺構である。堤防は八代城の石垣にも使用されている石灰岩を粗割し、野面積みで築かれている。また、堤防北端に位置する樋門跡も石灰岩の野面積みで築かれている。

8代藩主細川齊茲^{なりしげ}は八代・宇土・下益城3郡沖の2,600町歩干拓計画を企図した。野津手永惣庄屋の鹿子木量平^{かのこぎりようへい}は、その具現化を図るために百町新地開の干拓を発案・施工した。その後も量平とその息子謙之介は同計画に基づいて、文政2年（1819）に四百町新地開を実施した。この干拓に伴い築かれた大鞘樋門群は、当初5基の樋門群であったが、「殻樋」^{からひ}「二番樋」^{にばんひ}「江中樋」^{ごうちゅうひ}の3基が現存する。いずれも砂岩の切

石積みで築かれており、3～5連樋の樋管を有する樋門群である。

鹿子木量平・謙之介親子はさらに七百町新地開を成功させ、八代平野の干拓技術も飛躍的に発展を遂げることとなった。

これら八代平野に現存する高島新地旧堤防跡及び大鞘樋門群は、近世の干拓技術の変遷を辿ることができる貴重な遺跡群である。特に大鞘樋門群については、干拓を企画・立案、上申し、実際に施工した鹿子木量平・謙之助親子以来の記録類『鹿子木家文書』（個人所蔵、市立博物館寄託）が現存しており、遺構と堤防・樋門等の設計図、施工方法、見積等を記した諸史料を比較・検証することが可能である。

（9）近現代

明治維新を迎え、明治3年（1870）に八代城は廃城となった。翌4年に城跡は陸軍用地となったが、同年末に八代県が新設されることとなり、本丸跡に県庁が置かれた。

八代城廃城に伴い、松井家当主松井^{みつゆき}盈之は明治6年（1873）に松浜軒に移り、隠居していた父の章之は植柳村の別邸裁柳園に移り住んだ。裁柳園の屋敷は、明治28年（1895）に八代城跡三ノ丸に移築され、松井家分家の屋敷となった。また、裁柳園の跡地は八代市立植柳小学校となり、庭園は残され現在も校庭内

に所在している。

八代県は明治6年(1873)に廃止されて白川県(現在の熊本県)に吸収された。同年には本丸跡の大書院の中に代城校(代陽小学校の前身)が設けられ、同10年の西南戦争の際には代城校に野戦病院が置かれた。

西南戦争後、明治13年(1880)に本丸跡に懷良親王を顕彰する官幣中社・八代宮を設置することとなり、同16年に社殿が落成、翌17年に神霊鎮座の大祭が執り行われた。この時に本丸南側の石垣の一部を撤去して橋を架け、参道が設けられた。

八代海の干拓は、明治以降も進められた。明治29年(1896)に八代郡が基本財産造成を目的に行った^{ぐんちく}郡築干拓では、当時の先進技術が八代平野に導入され、明治33～35年(1900～1902)に甲号・乙号・丙号3基の樋門群が築かれた。3基の樋門群のうち、甲号樋門(^{きゅうぐんちくしんちこうごうひもん}旧郡築新地甲号樋門)が当時の堤防とともに現存し、現役の樋門及び堤防として稼働している。



Photo.13 旧郡築新地甲号樋門

郡築干拓では、昭和11年(1936)に干拓堤防の一部が決壊し、同13年に新たに二番町樋門(^{ぐんちくにばんちょう}郡築二番町樋門)が築かれ、現役施設として稼働している。



Photo.14 郡築二番町樋門

また、代城校が置かれていた大書院は昭和14年(1939)頃に二ノ丸跡に移築され、昭和34年に市営駐車場東側に再移築されたが、昭和61年2月に火災で焼失した。

北ノ丸跡には、明治14年(1881)に松井康之と興長を祭神とする松井神社が建てられて、同40年に郷社に列せられた。二ノ丸跡には、昭和23年(1948)に八代総合病院(現熊本総合病院)が開院、同47年には八代市役所が二ノ丸跡に移転し、翌48年に熊本県の総合庁舎も同所に移転(その後、長田町に移転)した。

平成28年(2016)4月14日(前震)・16日(本震)の2度の熊本地震が発生した。前震時には八代城跡の本丸北側にあたる廊下橋門東側の石垣が大きく



Photo.15 熊本地震で倒壊した八代城跡の石垣

孕み、本震の際に北面の一部が崩壊した。また、同月19日の余震により、隅角部を含む東面が崩壊した。

平成28年(2016)12月に保存修復作業に着手し、同30年2月に竣工、八代城跡は震災前の姿を取り戻した。

また、令和2年(2020)7月4日には、熊本県南部の豪雨により球磨川が氾濫し、市の文化財収蔵施設(旧八代

市立坂本西部小学校跡)が浸水し、収蔵していた多くの文化財が被災した。

なお、平成25年(2013)7月に、古麓城跡、麦島城跡、八代城跡、平山瓦窯跡を一括して「八代城跡群」として国史跡に指定するよう意見具申を行い、翌26年3月18日付で国史跡となった。また、同29年(2017)2月9日付で、古麓城跡に所在する国有林野部分が追加指定された。

八代は熊本県だけでなく、全国に名声を轟かせた種山石工等を輩出した。彼らは「干拓事業」や「めがね橋」の架設に携わり、八代に豊かな実りをもたらし、地域の交通を支えた。それ故に、八代は「石工の郷」と呼ばれている。このようなことから、令和2年(2020)6月には、「八代を創造(たがや)した石工たちの軌跡～石工の郷に息づく石造りのレガシー～」が日本遺産に認定された。その中のストーリーの一つである「干拓によってもたらされた平野-干拓事業と石工の活躍-」の構成文化財に、大鞘樋門群、旧郡築新地甲号樋門附・潮受堤防、郡築二番町樋門等の干拓に関わる文化財が選定されている。

また、高島新地旧堤防跡、大鞘樋門群、旧郡築新地甲号樋門と郡築二番町樋門は、江戸時代から近代にかけて継続して行われた八代海干拓事業の干拓施設築造技術の進展を辿ることができ、日本における干拓技術を知る上で重要な遺跡群であること、そして新田開発の具体的な様子や樋門・堤防等の土木技術の発達と変遷を知る上で重要な遺跡であることが評価され、令和3年(2021)12月に「八代海干拓遺跡」として国史跡に指定するよう答申が出され、令和4年(2022)3月15日付で国史跡に指定された。

2-4 社会的環境

(1) 人口

平成17年(2005)8月に、旧八代市と坂本村、千丁町、鏡町、東陽村、泉村の1市2町3村が合併し、新たな八代市が誕生した。

八代市の人口は令和3年(2021)9月末現在で124,286人である。世帯数

は50,242世帯、一世帯当たりの構成は2.41人となっている。また、令和2年(2020)10月時点の15歳未満(年少人口)が14,679人、15～64歳(生産年齢人口)が65,046人、65歳以上(高齢人口)が42,131人となっている。平成17年の合併時点の八代市の人口は136,800人余であったが、合併から現在まで少子高齢化と人口減少が続いている。

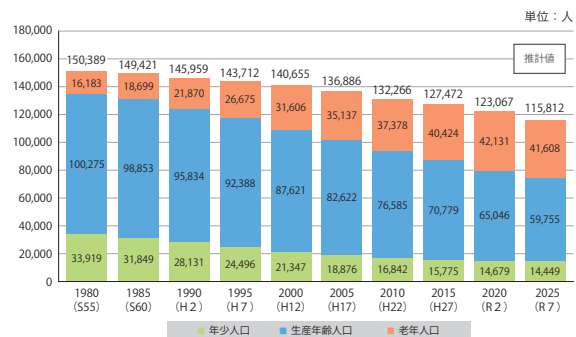


Fig.05 人口の推移

「第2次八代市総合計画」[第2期基本計画]より引用

(2) 土地利用区分及び産業別推移

八代市の土地利用区分は、森林が73.7% (約502km²)と最も多く、ついで農用地11.2% (約76km²)、都市計画法に定める用途区域(住居用地、商業用地、工業用地)の面積は約26km²である。

市域の大半を占める森林のうち、スギ・ヒノキの人工林が64.4%、広葉樹等の自然林が34.1%を占めている。森林のうち、民有林が約80%、国有林野が20%を占めている。

八代市の就業者数は医療・福祉業、卸売・小売業、農林業、製造業が多く、次いで建設業、運輸・郵便業となっている。

(3) 交通

八代市の交通網については、南九州の交通の結節点として、九州新幹線新八代駅、九州縦貫自動車道八代インターチェンジ、南九州西回り自動車道の八代南インターチェンジ及び日奈久インターチェンジが設置されている。そしてアジア物流拠点として県内最大の国際貿易港である八代港が整備され、水陸交通の要衝であることが分かる。特に八代港は、中世八代城以来の徳川の津に由来する港である。

八代港は、平成11年(1999)に韓国の釜山港までを結ぶコンテナ定期船が就航し、同9年からは5.5万トン級船舶に対する水深14m岸壁の整備が進められ、同25年に竣工した。また、同21年からは神戸港との国内定期船が就航し、翌年には国の重点港に指定され、南九州の物流拠点港として発展している。

さらに、八代港は平成29年(2017)1月に国の「官民連携による国際クルーズ拠点を形成する港湾」に選定され、7月には国の「国際旅客船拠点形成港湾」

に指定された。

11 月には、国がクルーズ船専用岸壁（耐震強化岸壁）の工事に着手した。

また、同月に熊本県が「八代港における旅客船拠点形成計画書」を策定し、平成 30 年（2018）2 月には熊本県と米国のロイヤルカリビアン社が「八代港クルーズ拠点形成協定書」を締結した。同年 11 月には国、熊本県、同社は「クルーズ拠点基本計画」を公表した。

なお、八代港は令和元年（2019）8 月に、公募により愛称が「くまモンポート八代」に決定し、翌年 3 月にクルーズ拠点が完成した。